



Title	懐徳堂講座の発展
Author(s)	鈴木, 敬
Citation	懐徳. 1986, 55, p. 6-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90658
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懐徳堂講座の発展



懐徳堂・友の会協議員

鈴木 敬

(大阪府立文化情報センター所長)

大阪府立文化情報センターが北区中之島に開設されたのは昭和五十六年十一月二日からであるが、その月の四日から懐徳堂記念講座が当センターのホールを会場として開催された。しかし何ぶん新設早々の当センターでは思うような準備もお手伝いもできず聴講者の数も僅かな状態であった。

だから府立文化情報センターでの懐徳堂記念講座が本格的に開始されたのは翌昭和五十七年五月(二十四日から二十九日まで)の懐徳堂春季講座(第六十三回)からである。主催は懐徳堂記念会、大阪大学文学部、府立文化情報センターであった。またこの回から聴講側の理解を深めるために記念講座のメインタイトルをはっきり掲げることになり、このときは「大阪の歴史と人物」と決まった。

「大阪の歴史と人物」の内容と講師は次のようであった。「高山右近の生きた時代」脇田修、「淀屋辰五郎と町人文化」今井修平、「近松と義太夫」信多純一、「多田源氏と石川源氏」黒田俊雄、「難波宮の歴史と天皇」長山泰孝、「西村天囚と懐徳堂」梅溪昇の先生方。

実のところそれまでは懐徳堂についての知識も関心もあまりなかったのであるが、この記念講座での講演によって江戸中期から明治初年にかけての「懐徳堂」の存在の意義が少しずつ分かってきたのであった。また懐徳堂堂友会の皆さんの熱心さも感じられたのである。これを契機として大学側の片

山良展、梅溪昇、脇田修、鳥野守、岸田知子、佐野喬氏その他の方々、堂友会代表の中島安之助氏そのほかの方と文化情報センターとの協力は密接となった。また昭和五十七年秋季講座のタイトルは「中国の文化と日本」でこのころから記念講座の聴講者数は次第に増加をみせてきた。

越えて昭和五十八年五月一日には「懷徳堂・友の会」（弘世現会長）が発足した。この年の春季講座は「近世画壇——人と作品」、秋季講座は「上方ことばの世界」だった。この「上方ことばの世界」の秋季講座と同時に文化情報センターのセミナー室で懷徳堂・友の会主催による「懷徳堂 先賢とその遺風」展（10月24日～27日）が公開された。「懷徳堂幅」「中井履軒画像」「中井履軒食毒詩幅」「天図・方図・潮図」「紙製深衣」など歴代の学主、教授らの珍しい遺品、墨跡三十余点が陳列され懷徳堂の歴史をこの目で確かめることができたのである。友の会が設けられてからは記念講座の参加者の幅もひろがりわが文化情報センターでは老若相集う楽しい講座風景がみられるようになった。また懷徳堂・友の会では当センターの記念講座とは別に他の会場でも古典講座が開設され内容は一層充実するものとなった。

昭和五十九年の春季講座は「日本文化における古典——伊勢物語の場合」秋季講座は「中国の人物像」、同六十年の春季講座は「大阪の町々——歴史の舞台として」とつづき、秋季講座は「現代芸術の世界」だった。この「現代芸術の世界」は若い参加者にはなかなか人気があったが年輩の方には少しなじみが薄かったとか。また同六十一年度の春季講座「日本学の地平」は内容は面白かったが、タイトルが内容を伝えにくいとの声もあがった。賛否いろいろだが、しかし要は好学の人々の志の問題

であると思う。

石浜恒夫さんは「懷徳」53号の中で、大正初年に再興された重建懷徳堂はそれまでの漢学塾の方向だけでなく、さらに視野をひろげた東洋学の展開のための「新しい学問の芽を作った」ところに意義の一つがあるのではないか、と問うておられた。傾聴すべき言葉だ。

この夏、故足立卷一さんの遺作をまとめたエッセー集『学芸の大阪』が刊行されたが、なかに木村蒹葭堂や懷徳堂について書かれているところがある。たとえば

「大阪の町人学校懷徳堂は儒学を講じることを表面の方針とはしていたが、実際には和学も大いに教えられていた。それも契沖の学問の流れなんだとみてもよい。契沖の弟子の大部分は京、大阪の町人であり、そのなかには懷徳堂の創立にかかわった住友一族の入江友俊もいたし、浄瑠璃の紀ノ海音のような人物もいたのである」

などとあって興味ぶかい。

さて「懷徳堂・友の会」の輪はますますひろがることだろう。この記念講座、古典講座をステップとして、二十一世紀に手渡す実りのある、新しい懷徳堂精神の発展がのぞまれるのである。